

自由直接話法と 自由間接話法における語り手の視点

顧 那

キーワード 自由直接話法、自由間接話法、視点、述部表現、人称

0. はじめに

物語における作中人物の発話や思考が引用形式で表されず、地の文に溶け込んでいるような話法形式でなされることがある。自由直接話法または自由間接話法と呼ばれるそのような話法形式は、¹日本語の小説にも中国語の小説にも見られる。²自由直接話法が完全に作中人物の発話や思考の直接的表出であるとするならば、自由間接話法は語り手の視点と作中人物の視点が入り混じった表現であると言える。自由直接話法と自由間接話法は、完全に作中人物による独白から地の文の語りに近いものまで、作中人物の内面への介入度という面で一つの連続体を成すものと考えられる。日本語または中国語の小説における自由直接話法と自由間接話法の部分を原文の中国語訳または日本語訳におけるそれと比較してみると、語り手の作中人物の内面への介入度がいささか変化する感じをしばしば受ける。そういった変化は必ずしも翻訳のずれによるものではなく、日本語と中国語のそれぞれの特徴によって生じるものだと考えられる。本稿では、自由直接話法と自由間接話法における述部表現と人称を考察することによって、その理由を追究してみたい。

1. 先行研究

1. 1 日本語の自由間接話法に関する研究

日本語の自由間接話法に関する研究は、山田（1957）の「代行描写」、波多野（1966）の「表象話法」、牧野（1978）の「共感話法」などといったさまざまな用語を用いて、さまざまな角度から進められ蓄積されてきた。以下、日本語における自由間接話法の文法的特徴に言及している保坂・鈴木（1993）と寺倉（1995）を概観する。

1. 1. 1 保坂・鈴木 (1993)

保坂・鈴木 (1993) は、自由間接話法が成立するための要件として次の四点を挙げている。

要件(1) 当該の部分テキストが、形態上は登場人物のパートなのか、語り手のパートであるのか識別がつかない、あるいはそのいずれのパートであるとも読者によって読みとられるように、テキスト構成がなされていること。

要件(2) そのためには、登場人物の思考・発言のパートの人称・時称が語り手の視点からの人称・時称に転換され、語り手のパートの地の文に同化していること。ただし、欧米語にあっては時称が転換されていない場合もある。日本語においては、時称の転換はふつうは行なわれない。

要件(3) 通常は、登場人物の思考・発言のパートは、その前後の文脈に、それがだれの思考・発言であるのかを明示する伝達詞（それは必ずしも「と考えた、と言った」というような伝達動詞である必要はない）が欠如していること。

要件(4) それにもかかわらず、当該の部分テキストが登場人物の思考・発言であると、読者が読みとれる識別標識が、その部分テキストの内かその前後に必ずおかれていること。(p.25)

そして、自由間接話法の形態的特徴を次のように述べている。

体験話法：直接話法を成立させる引用記号、1人称、伝達動詞の三つ、あるいは間接話法を成立させる伝達詞の付加が欠けている表現形態である。体験話法は、直接話法と文法形態上の共通点をもたないが、人称の転換もしくは人称代名詞・所有代名詞のゼロ記号化という点では、間接話法と共通した文法形態をとる。ただし、体験話法を登場人物の思考・発言であると読みとってもらうための手がかりとして、直接話法内そのままの直指詞 (Deixis) と話法の副詞 (Abtönungspartikel)、日本語の場合はとくに直接話法そのままの文末助詞を直接話法と共有する。

(pp.26-27)

1. 1. 2 寺倉 (1995)

寺倉 (1995) は、日本文学の分野で描出話法³が一つの手法としてあまり意識されていないことを指摘し、その理由を、日本語における描出話法には「英語

やその他の言語でのように、はっきりした統語的特徴が見られないため」(p.80)であると説明している。また寺倉は、描出話法の被伝達部を描出文と称したうえで、その統語的特徴を以下のように説明している。

- 1) 描出文の時制：英語には「時制の一致」という文法規則があるため、描出話法もこの制約を受けて、描出文の述語は過去形である。日本語では、発話・思考が過去に行われたものだからといって被伝達部の時制が変わることはない。(p.82)
- 2) 描出文の主語：英語では、間接話法と同様、三人称代名詞になる。日本語では、省略されることが多いが、省略されない場合は、「自分」が使われるのに対して、間接話法では、「自分」でも三人称代名詞でもよい。(p.83)
- 3) 描出文の種類：描出文には、疑問文、感嘆文、不完全な文など、直接話法の被伝達部と同様の文が許される。間接話法の被伝達文には、これらの文は許されない。(p.83)
- 4) 描出話法の伝達部 [主語+動詞]：「伝達部とは、発話・思考行為を表わす動詞とその行為の主語を表わす部分である」とし、「描出話法では示されなくてもよい」としている。もし示す場合は、英語では、文末に来るか、または文中に来るのも可能であるが、日本語では文中に来るのにはあり得ない。[主語+動詞]という連続した形が文末に来るのが描出話法の正規の構造だと考える。(pp.83-84)

1. 2 中国語の自由間接話法に関する研究

中国語の自由間接話法に関する先行研究は、日本語ほど豊富ではないようである。中里見は、ハーゲンナールの論文“Free Indirect Speech in Chinese” (1996) を日本語に翻訳するに際して、中国語の自由間接話法に関する研究は「言語学的に十分議論されていないだけでなく、文学的にもほとんど関心の対象となっていない」と述べている。以下、中国語における自由間接話法について論じているハーゲンナール (1996) と自由直接話法と自由間接話法に言及している申 (1998) の論を紹介する。

1. 2. 1 ハーゲンナール (1996)

ハーゲンナール (1996) は、「動詞の時制が欠如していることによって、中国語の自由間接話法においては、他の言語に比べて、語り手のテキストおよび作中人物のテキストの両方がともにより不明瞭になるという効果が生じる。作中

人物のテキストの場合、唯一、文法的人称のみが、作中人物と関連する特徴として残されるにすぎない。このことはつまり、自由間接話法と完全な作中人物による発話（すなわち直接話法）を区別するには、文法的人称の体系による以外に方法がないことを意味する」（中里見訳p.90）と述べている。また、ハーゲンナール（1996）は中国語と日本語とを比較して、「中国語は敬語動詞の体系を持たないために、直接話法と間接話法の違いは、ある意味で日本語にもましていっそう小さいといえる」（同p.90）、「日本語と同様に、中国語は人称代名詞や所有代名詞をかなり頻繁に省略するという点が、英語やその他の印欧諸語と異なる」（同p.91）と論じている。

1. 2. 2 申（1998）

申（1998）は、中国語の特徴に注目して、自由直接話法とも自由間接話法とも解釈可能な「両可型」の存在を指摘している。

在没有动词时态的中文中，自由间接引语和自由直接引语的不同往往仅在于人称，如果人称上也无法区分，就自然成了自由间接式与自由直接式的两可型。（動詞が時制を持たない中国語においては、自由間接話法と自由直接話法を区別するには人称によるしかない。人称による区別ができなければ、自由間接話法とも自由直接話法とも解釈できる「両可型」ができるのである。）（p.308）

1. 3 先行研究の問題点および本稿の立場

日本語の自由間接話法に関する先行研究には、自由間接話法には伝達部があるかどうか、主語が用いられるかどうか、用いられる場合その人称は何であるか、時制は何であるかなどについて、見解の不一致が見られる。これはまさに、日本語の自由間接話法が固定した単一の文法形式を有するものではないことを裏付けているように思われる。

一方、中国語の自由間接話法に関しては、ハーゲンナール（1996）と申（1998）がそこに時制がないことを指摘し、自由直接話法と自由間接話法を区別する唯一の手がかりは人称であると述べている。ハーゲンナールはまた、中国語と日本語との比較も行っているが、それは実例が少なく、緻密な議論にはなっていない。中国語も日本語と同様に人称代名詞や所有代名詞を頻繁に省略することが指摘されているが、省略の頻度に違いはないかどうか、もし違いがあるとなれば、それがどのように自由直接話法と自由間接話法に影響するのかなど、明らかにされていない部分がある。

顧（2003）において指摘したように、自由直接話法とも自由間接話法とも解釈可能なタイプ、及び自由直接話法と自由間接話法のいずれであるか断定できないようなタイプが日中両言語に存在する。日本語でも中国語でも、自由直接話法と自由間接話法は必ずしもはっきりと区別できるものではない。完全に作中人物による独白から地の文の語りに近いものまで、作中人物の内面への介入度という面で両者は一つの連続体を成すものとする。

2. 述部表現と語り手の視点

2. 1 述部による人称の特定

日本語でも中国語でも人称が明示されないことの多いことはよく知られている。張（1992）は、日本語の場合、人称が明示されていなくても、授受動詞や動詞の受身、敬語の使用などによって人称を読み取ることのできる文が存在することを指摘している。2. 1では、日本語と中国語の三人称小説において述部表現によって人称が決まるようなことがあるかどうか、あるとすると、具体的にどのように表されているかについて考察する。

2. 1. 1 日本語の場合

まず日本語の三人称小説において、張（1992）が指摘したように動詞の受身や授受動詞によって人称を読み取ることができるかどうかについて考察する。

- (1) ①学生に顔を見られたことがまだ気にかかっていた。②恵美子が言うとおり、相手は彼の顔を覚えていないかもしれない、そう思ってみたい一方、相手にこちらの顔を完全に記憶されてしまったような気もする。

（『砂の器』 p.79）⁴

(1)の文①と文②には、主語は明示されていないが、前後の文脈から思考主は作中人物の「関川」であることが分かる。久野（1978）は「受身文のカメラ・アングル」の原則を提示し、「受身文のカメラ・アングルは、新しい主語の指示対象寄りである」（p.130）としている。これに従うと、(1)の場合、語り手の視点が思考主の「関川」のほうに置かれていることになる。しかし、文①にあえて主語を補足しようとする、「関川」「彼」「ぼく」のいくつかを考えられる。つまり、動詞の受身によって主語の人称が特定されることはない。文①の場合、語り手の視点が作中人物のほうに置かれているとはいえ、述部が「気にかかっていた」と過去形になっているため、語り手の外的視点が感じられ、語り手は完全に「関川」の内面に入り込んでいないことが分かる。文②の述部は

「気もする」と現在形になっているため、通例、作中人物が現に感じていることの直接的表出として理解される。しかし、「彼の顔」というように、思考主のことは他称詞の「彼」で表されているため、文②は語り手の外的視点と作中人物の内面が入り混じった自由間接話法となる。

以上の考察から分かるように、動詞の受身や授受動詞は語り手の視点がどの作中人物に置かれているかを見るのに役立つが、そこから思考主の人称を読み取ることはできない。語り手がその作中人物の内面に入り込んでいるかどうかという問題も、さらに述部表現や人称などの要素を総合的に見ないと判断できない。

では、次の例に注目してみよう。

- (2) ①友子にして見れば、どっちにしても同じことだった。②妾に渡そうがマリ子を助けようが、どうせ彼女のおかねではないのだ。③ただ、上手な理屈を見つけだして、たみ子の気持を父親の方に向けてやりたい。④この伯母さんにおかねを貸すのは、どぶに捨てるのと同じことで、決して返してもらえない筈はないのだ。(『骨肉の倫理』 p.289)

澤田(1993:254)は、「～たい」のような感情述語の経験者名詞句は一人称でなければならないと述べている。(2)における文③は、人称が明示されていないが、述部に「～たい」という表現が用いられているため、通例、一人称が暗示されるように思われる。つまり、思考主は一人称の形で現れてはいないが、文③はやはり作中人物「友子」の内面の直接的表出として読み取るほうが自然であろう。文③は自由直接話法になる。

日本語では、思考や感情のような話し手の内面を表す文の主語に人称制限がかかることはよく知られている。(2)で見た「～たい」の他に、「思う」「悲しい」「だろう」のように、話し手の感情、推量など主観を表す動詞、形容詞、助動詞が現在形で用いられると、通例、思考主または発話主の思考・発話時点での心の状態の直接的表現になり、自称詞を暗示しているように考えられる。

しかし、実際の三人称小説においては、次のような例も見られる。

- (3) ①飛んでもない話だ。②友子はこの姉の身勝手を面罵してやりたい。③しかしそれが出来ないというのは、表面だけの女のつつましさだった。④内心は煮え返る思いである。(『骨肉の倫理』 p.380)

寺村(1982:145)は、感情の直接的表出である「ほしい」「～たい」などを述語とする文では感情をもつ主体が第三者だと不自然な文になる、と述べている。しかし、(3)のように、三人称小説にはこの人称制限を反するような例がたくさん見られる。「～たい」が用いられている部分は作中人物「友子」の願望の直接的表出であるが、他称詞の「友子」が主語に立っているため、そこから語

り手による客観的な視点が感じられる。作中人物の内的視点と語り手の外的視点が入り混じっている表現効果を生じ、文②は自由間接話法になる。

2. 1. 2 中国語の場合

ここでは、中国語の三人称小説においても、日本語のように述部の主観表現によって思考主の人称が特定されるようなことがあるかどうかを考察する。

- (4) ①不过，那理由不用去追究，他们要他走，他就走，决不留连，也不屑跟他们计较是非。②本来还想买点她爱吃的东西晚上回去孝敬她，讨她喜欢呢！（《围城》p.109）

(4)における文②は思考主の人称が明示されていない。それに主語を補足しようとすると、いくつかの可能性が考えられる。

- (5) 本来（他／方鸿渐／我）还想买点她爱吃的东西晚上回去孝敬她，讨她喜欢呢！

三人称代名詞「他」、固有名詞「方鸿渐」、一人称代名詞「我」のどれを補足しても自然な文になる。前後の文脈を考えると、確かに三人称代名詞の「他」を補足することが最も自然なように思われる。しかし、それは願望を表す助動詞の「想」によってそのように思われるものではないことに注目したい。「想」そのものには人称制限がないのである。これと同じことは助動詞だけではなく、思考や感情を表す動詞、形容詞にも当てはまる。すなわち、中国語における思考や感情を表す動詞、形容詞、助動詞などは中立的なものであり、それらによって主語の人称が限定されてしまうようなことはない。述部によって人称が暗示されるようなことがある日本語と対照的である。

2. 2 時制と語り手の視点

日本語の小説においては、思考や感情を表す述部の現在形と過去形の切り替えによって、語り手の視点が主観的であるか、客観的であるかが変わることがある。しかし、時制がないと言われている中国語にはそのようなことは起こらない。したがって、日本語または中国語の小説における自由直接話法と自由間接話法の部分とその中国語訳または日本語訳におけるその部分の間には視点の違いが見られるのではないかと予想される。本節では、それについて考察する。

中国語の小説においては、人の意志や願望を表す表現に助動詞の「想」「愿意」「要」などがある。これらの助動詞が使われる箇所日本語訳を見ると、現在形と過去形に訳された例がともに見られる。

- (6) ①印家厚不禁产生几分惭愧，他其实是在表演，若是平时，一巴掌早烙在

儿子屁股上了。②他是在为她表演的吗？③他不愿意承认这点。

（《烦恼人生》 pp.26-27）

- (7) 印家厚はいささか気がひけるのを感じざるをえない。いまのは演技である。いつもだったら、とっくに平手打ち一発しりっぺたに食らわしているところだ。この娘に見せるための演技だろうか？ そうだと認めたくはない。（『生きていくのは』 p.37）

(6)における文③の下線部からは二つの視点が感じられる。一つは、全知全能の語り手が傍観者の立場から作中人物「印家厚」の内面について語る視点である。もう一つは、語り手が「印家厚」の立場から自分の内面を表現する視点である。前者のように解釈すれば、文③はただの地の文になるが、後者のようにとらえれば、主語に語り手の存在が感じられる三人称の「他」が用いられているため、文③は自由間接話法として解釈できよう。どちらの解釈も可能なため、視点があいまいであると言える。

(7)は(6)の日本語訳であるが、文③における「不愿意」は「～たくはない」と現在形に訳されている。この現在形は作中人物「印家厚」の思考時を基準軸としたダイクティックな現在を表す。思考主の人称が明示されていないが、2. 1. 1で分析したように、現在形で用いられる感情述語の「～たくはない」は通例「印家厚」の内面の直接的表出としてとらえられやすく、自由直接話法として読み取られる。視点が中立的で、あいまいな「不愿意」は「～たくはない」に訳されたことによって、視点が作中人物のものとなっている。すなわち、作中人物の内面への介入度が大きくなっているのである。

- (8) 印家厚打住了。厂长到底要干什么？ 即便是厂长，他也不愿意被他耍弄。他干嘛要急匆匆离开车间跑到这儿踩薄冰？（《烦恼人生》 p.37）

- (9) 印家厚はそこで中断した。工場長はいったいどういうつもりなんだろう？ たとえ相手が工場長だろうと、かれはひとにからかわれたくなかった。なんで大慌てで職場を離れてここへ薄氷を踏みに来なくてはならないんだ？（『生きていくのは』 P.51）

(8)における「不愿意」は「～たくなかった」と過去形に訳されている。寺村（1984：349）は、「日本語では、感情を表わす一群の述語詞（形容詞だけでなく‘困ル’というような動詞も含む）の場合、その‘現在形’で終る文と、‘過去形’で終る文とは、同じ語の単なる活用変化のように見えながら、実は違ったムードを表わしている」と述べたうえで、「感情表出のムードはその述語が‘現在形’で終る（その感じ手は常に話し手自身）が、同じ述語詞が‘過去形’をとると、それはいわば‘主張’のムードに変わる（その感じ手は話し手とは限らない）」と説明している。また、澤田（1993:249）も、「感情表現において

は、現在形よりも過去形の方が客観性が高い」と述べている。中国語原文の(8)は(6)と同様に、視点があいまいである。しかし(9)では、「不愿意」が「～たくなかった」と訳されたことによって、作中人物の思考の対象化が起こり、客観的な外的視点となっている。

2. 3 本節のまとめ

本節の考察から明らかになったように、日本語の小説の場合、感情や思考を表す動詞、形容詞、助動詞などが現在形で用いられると、その主語に人称制限がかかり、思考主が明示されていない場合でも、それらの述部表現によって自称詞を読み取ることがある。自由直接話法と自由間接話法の部分においては、思考主が明示されていなければ、当該部分が自由直接話法とも自由間接話法とも解釈可能なタイプになりやすいが、述部表現によって自称詞を補ったほうが自然な場合は、自由直接話法になる。一方、中国語にはそのような人称制限がなく、感情や思考を表す動詞、形容詞、助動詞などは中立的なものである。自由直接話法と自由間接話法の部分においては、思考主が欠けていても、述部表現によって思考主の人称が特定されるようなことはないため、自称詞と他称詞のどちらをも補足可能であり、当該部分は自由直接話法とも自由間接話法とも解釈可能な部分になる。

また、日本語の小説の場合、現在形で現れる感情、思考を表す述部表現は作中人物の内面の直接的表出として読み取られやすいが、過去形が用いられると、客観性が増し、語り手による外的視点になる。つまり、日本語は述部の時制によって自由直接話法と自由間接話法の間で間接度をコントロールすることが可能であるが、中国語では時制がないためにそれができず、自由直接話法とも自由間接話法とも解釈可能なあいまいな表現を作ってしまう。

3. 人称と語り手の視点

申(1998)とハーゲンナール(1996)は、中国語において自由直接話法と自由間接話法を区別する唯一の手がかりは人称であると述べている。しかし、欧米語とは違って、中国語でも日本語でも人称代名詞や所有代名詞は頻繁に省略される。張(1996)は、中国語の短編小説『在其香居茶館里』、『小二黒結婚』、『為奴隶的母亲』の原文とその日本語訳とを比較してみたところ、「中国語の小説に用いられる人称代名詞の語別数としての数は少ないが、人称代名詞の使用総数は多い。一方、日本語の場合、語別数としての用語数は多いが、人称代名詞の

使用総数はほぼ中国語の半分しかない」(P.77)と指摘している。張の研究は、調査対象とした範囲こそ限られているものの、中国語よりも日本語のほうが人称を頻繁に省略する傾向があることを示している。

日中両言語間に人称の使用頻度に差が見られるため、小説の原典とその翻訳との間では、人称が省略されたり、新たに補足されたり、異なる人称に訳されたりすることは当然起こるのであろう。本節では、日本語または中国語の小説とその翻訳における自由直接話法と自由間接話法の対応箇所を取りあげ、人称の違いが語り手の視点と話法にどのような影響を与えているかを考察したい。

3. 1 人称が補足された場合

日本語の小説が中国語に訳される時、原文では明示されていない人称がしばしば補足される。

- (10) ①けれどもこの社会はまだ、彼にとって直接的な加害者ではなかった。②あと二年たてば大学を卒業する。③いわゆる社会人となる。④その時から本当の闘いが始まる筈だった。⑤準備期間は二年しかない。⑥そのあいだに社会人としての資格をつくり、実力をたくわえ、狡猾さと凶太さを身につけなくてはならない。(『青春の蹉跎』 p.11)
- (11) ①然而，这个社会对于他来说并不是直接的加害者。②再过两年他就要大学毕业，也就是说将要成为“社会人”。③从那时候起他才开始进行真正的斗争。④只有两年的准备时间。⑤在这段时间里，他必须获得“社会人”的资格，积蓄实力，学会狡猾和厚颜无耻。(《青春的蹉跎》 pp.5-6)

(10)における文①には他称詞の「彼」が一回使われただけで、後に続く文には人称詞が用いられていない。しかし、中国語訳の(11)のほうは、文②、文③、文⑤に三人称代名詞の「他」が補足されている。2. 1. 1で考察したように、日本語の場合、述部に思考主の内面を表す動詞、形容詞、助動詞が現在形で用いられていると、人称の明示されない文は思考主の内面の直接的表出として解釈されやすく、自由直接話法になる。これに対して中国語訳のほうは、「他」が補足されたため、語り手の外的視点が感じられ、自由間接話法として読み取られやすい。従って、(10)と(11)を比較してみると、中国語訳より日本語原文のほうが語り手の作中人物の内面への介入度が高いと言えよう。

3. 2 人称が省略された場合

逆に、中国語小説における人称が日本語訳では表されないことがよくある。

- (12) 我也许应该拿绳子去把母亲绑来。赵胜天说：“您们放心，我当然要去商量。”他的女儿已经第三次换尿布了。炉子上的汤也熬烂了。眼见太阳偏

西，尿布不及时晾出去明天用什么？（《太阳出世》 p.151）

- (13) ①お袋を縛って連れて来いってのか。②趙勝天は「どうぞご安心を、もちろん相談します」と言った。③——娘はもう三度もおしめを換えた、炉のお湯もぐらぐら沸いてる、太陽も西に傾いた、おしめを早く干さなくちゃ、明日の分がなくなるんだよ。（『太陽誕生』 p.176）

(12)のように一人称の「我」が用いられる場合、語り手の視点が完全に作中人物「趙勝天」の内面に入り込んで、直接作中人物の視点から語ることになる。(13)では人称が省略されて訳されているが、文①はやはり作中人物の内面の直接的表出として読み取られやすく、原文と同じように自由直接話法になる。

- (14) ①这算什么！②等着瞧吧。③比起周琳娜王珏，她还差得老远。④她从来没有这么强烈地意识到自己幼稚无知：不会当家过日子、不懂世事艰辛、不知道许多常识性的生活道理。⑤她在图书馆工作几年没有读完一本书。⑥她是那么后悔！⑦以后她要好好抚养女儿，好好对待丈夫，好好治理这个家，好好看点书学点知识。（《太阳出世》 p.178）

- (15) ①こんなことで驚かないで！②これからを見ててよ。③周琳娜や王珏と比べたらまだまだよ。④彼女は今まで、自分がこんなに幼稚で無知だと思ったことはなかったのだ——家事の責任も果たせず、世間の辛さも知らず、たくさんの生活上の常識もない。⑤図書館で仕事をしていたのに一冊の本を最後まで読んだこともない。⑥なんと残念なことか。⑦これからはしっかり娘を育て、しっかり夫と向き合い、家事もやり、読書で知識も増やそう……。 （『太陽誕生』 p.211）

(14)における文③～文⑦では、思考主は三人称代名詞の「她」で表されている。日本語訳の(15)では、文④を除けば人称が省かれている。(14)では語り手による外的視点が感じられるのに対して、(15)では文④を除けば、それがほとんど感じられない。原文と比べると、日本語訳のほうが自由直接話法に近く、作中人物の内面への介入度が高い。

3. 3 異なる人称に訳された場合

原文における人称とは異なる人称に訳された場合がある。そのような場合にも原文と翻訳の間に語り手の視点の変化が見られるであろうか。

- (16) 他应该做的第一件事是开灯，他知道，一个家庭里半夜发生意外，丈夫应该保持镇定。可是灯绳怎么也摸不着！印家厚哧哧喘着粗气，一双胳膊在墙上大幅度摸来摸去。（《烦恼人生》 p.1）

- (17) 電灯をつけるのが自分の任務だ。夜中に予期せぬ事が起きたとすれば、まず夫たるものこそ平静を保たねば……。ところが電灯の紐がどうして

も手に当たらない。印家厚はハアハア息をあらげながら、両手で壁を大きくまさぐった。(『生きていくのは』 p.5)

(16)における三人称代名詞「他」は「自分」と訳されている。広瀬(1988)は、「自分」は私的自己を表す固有のことばであるとし、内的な意識の世界における自称詞であるとしている。中国語の原文における「他」は語り手の外的視点によるが、「自分」に訳されると、作中人物「印家厚」の内面への介入の度合いが高くなり、作中人物寄りの視点になる。この事実は、小説の原文とその翻訳との間に見られる人称の違いによって視点が変化するを如実に物語っている。

(18) 她知道了苏小姐和自己往来,就改变态度,常说讨厌话。效成对自己本无好感,好像为他补习就该做他的枪手的,学校里的功课全要带回家来代做,自己不答应,他就恨。(《围城》 p.109)

(19) あの女は蘇さんがおれと交際ってると知ってから、態度一変し、いつもいやがらせばかり言いやがる。効成はおれにもともと好感を持たず、やつの勉強にはおれが替え玉になるべしみたい、学校の課目は何もかも持って帰って代りにやらせ、おれが承知しないと、たちまち逆うらみだ。

(『結婚狂詩曲(上)』 p.195)

(18)の場合、思考主は「自己」によって表されている。申(1998)は、「中文中常用的代词“自己”是模棱两可的,它也增加了第三人称叙述中“两可型”出现的机会(中国語においてよく用いられる代詞の「自己」はあいまいな表現であり、三人称物語における「両可型」が現れる頻度を高くしている)」⁵(pp.307-308)と述べている。申の説に従えば、(18)における「自己」は「我」とも「他」とも置き換えられるあいまいな表現であるため、(18)は自由直接話法とも自由間接話法とも解釈されうる表現になる。これに対して、日本語訳の(19)には自称詞の「おれ」が用いられている。作中人物の内面の直接的表現であるため、それは自由直接話法である。

3. 4 本節のまとめ

本節では、日本語または中国語の小説における自由直接話法と自由間接話法の思考主を表す人称は、ほとんどの場合、原文と異なる人称に訳されたことが明らかになった。こういった原文と翻訳の間に見られる人称の違いは語り手の視点に変化をもたらし、中国語におけるよりも日本語におけるほうが作中人物寄りの視点が取られやすく、語り手の作中人物の内面への介入度が大きくなる傾向がうかがえる。

4. 語り手の作中人物の内面への介入度

中川（1983：207）は、自由間接話法に間接度が存在することに言及して、「ひとくちに自由間接話法といっても、人物の肉声にちかい調子のものから、凝縮された要旨といってよいタイプのものまで幅がある。そしてひとつづきの自由間接話法であっても、途中で間接度はかわることがある」と述べている。また山岡（1991）は、英語の三人称物語に関して、その表現形式は登場人物の目から見たものと語り手の声だけしか聞こえないものという二項対立的な分布状態を呈するのではなく、語り手の様々な介入度を反映した、一つの連続体をなすものであるとしたうえで、それを数値化することによって語り手の介入度の定量化を試みている。

語り手の作中人物の内面への介入度には本稿で検討した述部表現、人称以外にも指示詞、作中人物の身分・地位に合った言葉遣いなど、いろいろな要素が関わっている。現在形で表される主観表現、自称詞で表される思考主の人称など、作中人物の視点寄りの要素が多ければ多いほど作中人物の肉声に近い表現になる。一方、過去形や他称詞など語り手の客観的な視点による要素が多ければ、語り手の手で整理されて間接化した形式になる。このことを以下の作例にもとづいて確かめてみよう。

- (20) ①たどえ相手が工場長だろうと、俺はひとにからかわれたくない。
 ②たどえ相手が工場長だろうと、自分はひとにからかわれたくない。
 ③たどえ相手が工場長だろうと、かれはひとにからかわれたくない。
 ④たどえ相手が工場長だろうと、印家厚はひとにからかわれたくない。
 ⑤たどえ相手が工場長だろうと、自分はひとにからかわれたくなかった。
 ⑥たどえ相手が工場長だろうと、かれはひとにからかわれたくなかった。
 ⑦たどえ相手が工場長だろうと、印家厚はひとにからかわれたくなかった。
- (21) ①即便是厂长，我也不愿意被他耍弄。
 ②即便是厂长，自己也不愿意被他耍弄。
 ③即便是厂长，他也不愿意被他耍弄。
 ④即便是厂长，印家厚也不愿意被他耍弄。

(20)からは、語り手の作中人物の内面への介入度の違いをうかがうことができよう。文①は語り手が自ら姿を消し、完全に作中人物「印家厚」の視点となっ

ているため、自由直接話法になる。文②には広瀬（1988）が言う内的意識の世界における自称詞である「自分」が用いられているため、これも自由直接話法として読み取られやすい。文③と文④は述部の主観表現が現在形で表されており、作中人物の視点が取られているが、思考主が他称詞の「かれ」と「印家厚」で表されているため、そこから語り手の存在が感じられ、自由間接話法になる。文⑤は「自分」が用いられているものの、述部の過去形で語り手による外的視点を感じられるため、これも自由間接話法として読み取られるであろう。文⑥と文⑦は思考主の人称も述部の時制も語り手の外的視点によるものなので、地の文に最も近い表現になる。一方、②)の中国語の場合、語り手の作中人物の内面への介入度は人称による判断しかできない。文①の自由直接話法から順に介入の度合いが小さくなり、文④に至っては地の文に近い表現になっている。中国語の場合は、このように語り手の作中人物の内面への介入度を時制によるコントロールが不可能なため、日本語の場合ほど介入度に変化の余地がないと言えよう。

5. おわりに

本稿では、日本語または中国語の三人称小説における自由直接話法と自由間接話法の部分をその中国語訳または日本語訳におけるそれと比較することによって、語り手の視点が変わることを確認した。述部表現と人称について考察した結果、その理由は単なる翻訳によるずれではなく、日本語と中国語の特徴から生じたものであることが明らかになった。これらをまとめると以下のようになる。

1. 日本語の場合、話し手の感情、推量など主観を表す動詞、形容詞、助動詞が現在形で用いられると、通例、思考主または発話主の思考・発話時点での心の状態の直接的表現になり、自称詞を暗示しているように考えられる。そのような表現が含まれる部分は、思考主が明示されていなくても、自由直接話法として読み取られやすい。一方、中国語にはそのような人称制限がなく、感情や思考を表す動詞、形容詞、助動詞などは中立的なものである。
2. 日本語は述部の時制によって自由直接話法と自由間接話法の間で間接度をコントロールすることが可能であるが、中国語では時制がないためにそれができず、自由直接話法とも自由間接話法とも解釈可能なあいまいな表現を作ってしまう。

3. 日本語も中国語も人称が明示されないことがよく見られるが、日本語のほうは特にその頻度が高いようである。人称が明示されないような場合、述部の主観表現の人称制限によって一人称が暗示されることのある日本語は自由直接話法に近い表現として読み取られることがあるが、中国語は述部表現が中立的であるため、自由直接話法とも自由間接話法とも解釈されうるあいまいな表現になる。
4. 中国語におけるよりも日本語におけるほうが作中人物寄りの視点が取られやすく、語り手の作中人物の内面への介入度が大きくなっている傾向がある。また、中国語の場合には時制がないため、日本語の場合ほどには介入度に変化の余地がない。

注

- 1 引用の形でなされない作中人物の発話や思考の部分の名称に関しては、言語や研究者によってさまざまなようである。「自由直接話法」と「自由間接話法」という英語からの訳語をそのまま日本語や中国語のそれに相当する話法形式に適用して良いかどうかはともかく、本稿ではこれを、大勢に従って自由間接話法と呼ぶことにする。
- 2 本稿では、1940年代以降に書かれた日本語と中国語の三人称小説を分析対象としている。作家や作品によって、自由直接話法と自由間接話法の使われる頻度が異なるが、そういった話法形式が存在することは確かである。
- 3 中川（1983）は、「フランス語でle style indirect libre（自由間接体）と呼ばれるもの、ドイツ語でerlebte Rede（体験話法）と呼ばれるもの、そして英語ではfree indirect speech（自由間接話法）あるいはrepresented speech（描出話法）と呼ばれるものは、形式の細部に多少のちがいはあるものの、おなじ形式とみてさしつかえないものである。文法形態の上で対応しているばかりでなく、機能的にもまったくおなじである」（p.7）と述べている。したがって、寺倉（1995）における「描出話法」は本稿で言う「自由間接話法」に当たると思われる。
- 4 例文における下線はすべて筆者による。小説原文と翻訳の両方を掲載した例に関しては、一重下線は翻訳が原文と同じように訳されているところを、二重下線は原文と翻訳と異なるところを示すよう、使い分けている。
- 5 申の言う「両可型」と同じ意味で、本稿では「自由直接話法とも自由間接話法とも解釈可能なタイプ」という表現を用いている。

参考文献

- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 大修館書店
- 顧那 (2003) 「自由直接話法と自由間接話法に関する日中比較研究——三人称童話を分析対象として——」 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻修士学位論文
- 澤田治美 (1993) 『視点と主観性——日英語助動詞の分析——』 ひつじ書房
- 張佩霞 (1996) 「中国語、日本語における人称代名詞の使用とそこに窺われる文化の違い」 『語文論叢』 第23号 千葉大学文学部国語国文学会
- 寺倉弘子 (1995) 「『描出話法』とは何か」 『日本語学』 (1995、11月号) 明治書院
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅰ巻』 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』 くろしお出版
- 中川ゆきこ (1983) 『自由間接話法』 あぼろん社
- ハーゲンナール, エリー 著 Theo A.J.M. Janssen and Wim van der Wurff ed., *Reported Speech: Forms and Function of the Verb*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 1996. 中里見敬 訳
- (2002) 「中国語における自由間接話法」 『言語科学』 第37号 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
- 波多野完治 (1966) 『文章診断学』 至文堂
- 広瀬幸生 (1988) 「私的表現と公的表現」 『文藝言語研究14 言語篇』 筑波大学 文芸・言語学系
- 保坂宗重・鈴木康志 (1993) 『体験話法 (自由間接話法) 文献一覧——わが国における体験話法研究——』 茨城大学教養部
- 牧野成一 (1978) 『ことばと空間』 東海大学出版会
- 山岡實 (1991) 「語り手の介入度の定量化と表現形式の連続性——三人称物語の場合——」 『大阪府立大学紀要』 人文・社会科学 第39巻 大阪府立大学
- 山田良治 (1957) 「現代作家と代行描写」 『言語生活』 第72号
- 申丹 (1998) 《叙述学与小说文体学研究》 北京大学出版社
- 张群舟 (1992) 〈日语人称的特点及其潜在形式〉 《日语学习与研究》 1992年第1期

例文出典

- 石川達三（1976）「骨肉の倫理」『筑摩現代文学大系50 石川達三集』筑摩書房
- 石川達三『青春の蹉跎』CD-ROM版新潮文庫100冊
- 錢鐘書 作 荒井健・中島長文・中島みどり 訳（1988）『結婚狂詩曲（上）』岩波書店
- 池莉 著 田畑佐和子 訳（1994）「太陽誕生」『新しい中国文学5 初恋』早稲田大学出版部
- 池莉 著 市川宏 訳「生きていくのは」田畑佐和子・原善 編（2001）『現代中国女性文学傑作選2』鼎書房
- 松本清張（1971）『松本清張全集5 砂の器』文藝春秋
- 池莉（1995）《一冬无雪／池莉文集2》江苏文艺出版社
- 钱钟书（1980）《围城》人民文学出版社
- 石川达三 著 金中 译（2001）《青春的蹉跎》百花文艺出版社

